

## はじめに

著者	田間 泰子, 伊田 久美子
引用	女性学連続講演会. 2009, 13
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/12684">http://hdl.handle.net/10466/12684</a>

## はじめに

1995年に開催された第4回世界女性会議において、ジェンダー平等の理念が再確認され、あらゆる分野におけるジェンダー主流化の必要性が『北京行動綱領』に謳われました。しかし、日本ではその後、ジェンダー平等への法整備等の動きとともに、バッシングも活発になりました。2005年には、内閣府が「ジェンダー・フリー」という用語を条例等で使わないことが適切という通知を地方自治体に出したことが引き金となり、「ジェンダー」の使用をも自主規制する動きが各方面で広がりました。「ジェンダー」という言葉は、まだまだ一般的な理解が得られていないように思われます。

その一方で、大学で教鞭をとっていると、学部学生・院生さんたち、そして市民の方々から、相変わらず「ジェンダー」に関わる問題への熱い関心を感じ取ることができます。さらに、2008年後半期から急展開した日本の経済情勢は、もちろん男性にも厳しいものではありませんが、非正規雇用に偏っている女性労働者にはとりわけ厳しく、不平等が男女間にまだ多く存在していることを明らかに示しています。

今年度の連続講演会・連続セミナーを企画した2008年初頭には、まだ経済情勢は急激に悪化してはいませんでした。しかし、女性学研究センターではジェンダー平等が決して達成されておらずフェミニズムやジェンダー論が必要であると考え、その普及の一助として今回のテーマを設定しました。「ジェンダー」をより良く理解するため、1990年代以降に進展の著しいジェンダー地理学の研究成果に特に着目し、日々の生活空間を手がかりにして、私たちがどのようにジェンダーを体験し、またこの生活空間をどのようにジェンダー化しているのかを考えたいと思ったのです。

講師の方々と、参加者の方々の熱心な聴講と鋭いご意見・質問に、心から感謝申し上げます。なお、講師の方々の主張のなかには、図らずも主催者と見解が同じではないものが含まれることになりましたが、ジェンダー問題が今どのような状況にあるのかについては、読者の方々のご判断にお任せしたいと考え、ご講演記録をそのまま残しています。

大阪府立大学女性学研究センター

田 間 泰 子

伊 田 久 美 子